

現場の“実践知”共有 日本老人福祉財団 リハの事例等発表

介護付有料老人ホーム7カ所を運営する一般財団法人日本老人福祉財団(東京都中央区)は2月20日、「第23回〈ゆうゆうの里〉職員実践研究発表会」を開催。全20演題の発表が行われ、優れた取り組みとして4演題に優秀賞が授与された。

佐倉(ゆうゆうの里)ケアサービス課の今井桜月氏は、こまめな「生活リハ」の実践について報告。対象となった入居者の78.5%で、B-I値の維持・向上が確認されたという。

同施設生活サービス課鶴岡真弥氏も優秀賞を受賞。学生時代の知識を活かし腰痛の原因を追究。睡眠時間の短さやストレスが影響するとした。

伊豆高原(ゆうゆうの里)食事サービス課の三浦伊織氏は、現在の食材価格高騰への対応策を発表。仕入れ価格の見直しや原価調査、入居者アンケートなどの積み重ねで、上半期278万円のコスト減につながった。

神戸(ゆうゆうの里)診療所の木地智恵美氏は、「看護サマリーの見直し」について発表。記入の質のばらつきを改善するため、簡潔で統一された要旨の作成に取り組んだ。

審査員を務めた奈良東病院の鉄村信治理事長は講評で、「医療や介護に携わる人は、働いている限り常に新しいことを学ばなければならない」という責務がある。研究発表を通じて、これからも質の向上を目指してほしい」と述べた。



▲表彰式の様子